社団法人私立大学情報教育協会

平成24年度第2回産学連携プロジェクト委員会議事録

Ⅰ. 日　時:平成24年12月25日(火)午後5時00分～午後7時00分

Ⅱ. 場　所:アルカディア市ヶ谷　私学会館　会議室

Ⅲ. 参加者:向殿委員長、田辺委員、渡邉委員、細野委員、大原委員、青木委員、
斎藤ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、青山ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、寺島ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、大久保ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、井端事務局長、
森下、坂下(記録)

Ⅳ. 検討事項

1.　平成 24 年度「第 4 回産学連携人材ニーズ交流会」の進め方について

・事務局より開催要領・開催趣旨、プログラム、について説明、開催日程・会場は平成25年3月13日(水)午後より、新宿住友ホールを予定している。これに対し以下の意見があった。

・大学がやっていることをもっとアピールして欲しい。企業の人事担当者は知らないこと多い。

・プログラムの流れとして初めに大学2名、企業2名の発表から入っていった方が良いのでは。

・1番目、2番目の30分の内容にもっと時間を割いたらという意見に対し、事務局より「人材育成の目標・・」、「大学教員の現場研修の振興・・」は説明15分、意見交流15分をイメージしていたとの説明があった。

・今回のプログラムにおいて前回の反省を踏まえると、発表主体になりはしないか懸念する。

・冒頭の会長挨拶では人材交ニーズ流会の経緯の解説を入れ5分を10分位の挨拶に変更いただくと全体の取り組み状況が理解されやすいと思う。(到達目標・学士力の考察・教育改善モデル・実現に求められる教育力⇒教員の企業現場研修⇒社会スタディまでの一連の流れ)

・産学連携の問題は出尽くした。会議はするが前に進んでいないことが多い。実務部隊が動いておらず概念形成ばかりやっているのが実態。お互い何をできるかの議論する場がない。私情協はそれをやっている部隊である。

・人材育成の目標・水準、人材像等についてのモデルを私情協としては提示した。しかし、今の大学体制では出来ない。産業界としてどう受け止めれるのか。そういう議論をしたい。オープンイノベーションをつくるような仕組みづくりが重要。産業界の協力が必要で共生のしくみづくりが大事。

・一つの大学では成し遂げられない。企業の社長や大学の学長に響かない。これからの日本社会で産業界は単に雇用するだけでなく、若者の教育を大学任せでなく産業界ともども真剣に育てる考えが必要である。

・産業界として受け止める立場も欲しい。同友会、産総研、経団連、トップレベルを呼ぶ。全体が分かる人に出席いただく（ガバナンス系・経営トップレベルの人達に参加いただく必要ある）

・新聞社、TV 局にも声をかけるべき。日本は社会全体で若者を育てるイメージを出す。先に課題を出し、議論しあう。

・大学、企業各々要求を出しあい議論に入る。

・教育モデルを各大学に知らしめる、教員の教育力が課題である。研究は熱心だが、教育力は今一。教育の現場実態は研究は評価されるが教育力は評価されにくいのが実態。

・工学部系は研究中心、研究の産学連携はされているが教育の産学連携がされていない。

・高齢化が進み、若年労働者が半減している。社会の中で若者を育てる。社会スタディが大事。

・企業の CSR は主に初等教育、中等、高等教育には金を出さない。日本一流企業は米国の大学には寄付する。日本の大学に対してそれ程でないがこれで良いのか。

・人材ニーズ交流会において教員の教育力の是非を議論すべきではないと考える。

・関西のある大学の施設を見学した、学生は伸びるだろうと思えた。理由としては何事にもオープンで他の大学企業人に学内をオープンにしている。研究室も全て解放。学生はきびきびしており、自分の大学に来てもらうことも大事では。大学はクローズである。人に見せたがらない。

・研究論文は重視されるが教育力はそれほどでない。

・入学時の面談の時に帰属意識を見極める。大学をどのように良くしようとしているか等。

・学生は2極化し優秀な人とそうでない人に分かれる。重要な事は中間層が問題である。

・インターンシップ制度は国内では期間が短すぎてうまくいかない事が多い。海外に行くと半年ベースとながく受け入れ体制が整っている。日本は1日～2日（企業）と短期が多い、就職と連動？

・開催趣旨をインパクトある内容に見直す。社会を変革、大学だけ、社会だけと縦割りになっている、大学ガバナンス系、企業社長系の人たちが出て、新経連の人達を呼ぶ。教育危機突破と位置付け開催趣旨を作り変える

3本の柱は生かす。情報交換ばかりやっている場合でない。オープンイノベーションの言葉、内容を入れる。具体的に動く。

・人材ニーズ交流会は大学、企業側からの意見を徹底的に戦わせた方がよい。

2. 社会スタディの場の構想について

・事務局より社会スタディの進め方を説明。

・学生への気づきを持たせるのが目的で対象は高校生、大学生中心に募集。

・小論文は、200字以内のつぶやきレベルをイメージしている。

・気づきを持たせる。ICT を使って日本や世界でイノベーションを起こす。

・幅広い学びをさせる、若者にチャレンジさせる

・プログラムの内容は、若者が希望と夢を自らが描けるきっかけになるよう、世界の動き、産業界の将来像、社会的役割、今後の課題などについて学識者、有識者、企業人からわかりやすく説明する。
・司会形式で進め一方的にならぬよう配慮する。また、スマホ等で参加者のつぶやきをスクリーンに出しそれを見て司会が話題を提起していくイメージ。
・有識者のイメージ、石倉、米倉、須藤さんは学生関係、業界側からオープンイノベーションに関する話をしていただく。産総研、新エネルギー関係、神経連、経済同友会等若者に訴える力のある人。
・人選については私情協として更に詰めていく。
・参加できなかった人達のためユーチューブで編集し、後日講演内容を配信予定。また、終わった後の反応も取り上げていきたい。大学は1、2年生、高校生は2年生をターゲットとする。
・参加者配信の仕方について。ライブ情報を流すのも面白いが個人情報も関係するので、編集後配信を計画している。有識者は事前承諾は困難と思われる。
・1200名入る講堂でライブ経験した事があるが運営が非常に大変であった。今回は慎重に取り組みたい。
・1回目は実験として実施する。オンラインは難しい。司会は大原先生に依頼したい。
・アンケートをとる。2/12 で募集を一度締め切り、企業、大学に対しアンケートをとる。

3. 平成25年 3 月実施予定 2 社の「企業の現場研修」について

・富士通(3/7-8),伊藤忠(3/14)の現場研修概要について、先回指摘いただいた件を踏まえ説明。先回、ご意見やご指摘を受け今回はインパクトあるテーマと内容に編集し直しした。
・案内は現場もさることながらトップから流した方がよい。

4. その他

次回の委員会予定日は2013年2月8日(金)17:00～19:00